

〔課題演習報告〕

中学校における不登校の未然防止の取組 ーSEL-8S プログラムを使った社会的能力の向上を通してー

佐 竹 真 由 子

Mayuko SATAKE

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻生徒指導・教育相談リーダーコース
直方市立直方第二中学校

(2020 年 1 月 6 日受理)

本研究は、登校しているすべての生徒の社会的能力向上のために、社会性と情動の学習の中での SEL-8S プログラム (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School) を実施し、周囲の人々や集団と良好な関係を持つ力を身に付けることで不登校の未然防止に効果があるかを検証した。登校状態及び欠席日数から「登校生徒」「不登校傾向生徒」に群分けした。「不登校傾向生徒」には、教室に入ることができず、別室で学習している「別室登校生徒」を含み、「別室登校生徒」には個別に SEL-8S プログラム実施した。第 2 学年での試行 (研究Ⅰ) の後、実践校全学年生徒 628 名を対象として、各学年 8 回以上のプログラムを実施した結果、未実施校に比べて、欠席日数が 30 日以上の子供の増加がゆるやかとなり、SEL-8S 生徒による自己評価の「他者への気づき」「責任ある意思決定」、不登校傾向尺度の「心理的な不調傾向」に改善が見られた (研究Ⅱ)。

キーワード：不登校、不登校傾向、社会的能力、社会性と情動の学習 (SEL)、SEL-8S プログラム

1 問題と目的

(1)はじめに

不登校児童生徒数は高水準で推移しており、生徒指導上の喫緊の課題となっている。生徒指導リファ「不登校の予防」(国立教育政策研究所, 2016) では、不登校の防止のため学校で取り組むべき対策として「教育的予防」と「治療的予防」の 2 つを挙げている。「教育的予防」とは、すべての児童生徒が将来にわたって自ら問題を回避・解決していきけるような大人に育つことを目標とした働きかけである。「治療的予防」とは、早期発見・早期対応の考え方で、学校を休み始めた児童生徒への個別対応を軸とした働きかけである。これらのうち、「教育的予防」こそ、不登校の未然防止の大きな柱となる。

実践校の不登校実態調査によると、生徒の不登校の理由として最も多いのが「無気力」、次いで「精神的不安定」「生活習慣の乱れ」となっている。こ

れらの「無気力」「精神的不安定」の根本的原因となっていることの一つに、学級内外における人間関係の脆弱さが考えられる。狭い人間関係の中でのトラブルが解決できなかったり、人間関係の修復自体を煩わしく感じたりした結果、学校への足が遠のくという事例がある。

(2)不登校と社会的能力の関係

不登校という事象に対して学校がまず取り組むべきことは、全ての児童生徒が学校に来ることを楽しいと感じ、学校を休みたいと思わせないような、日々の学校生活の充実である (国立教育政策研究所, 2016)。学校生活の中で生じるトラブルを自力で乗り越え、友だちとの関係を適切にもつことができる力を身に付けることができると、日々の学校生活が充実したものとなる。そしてどの生徒にとっても学校が楽しいと感じることが、結果として不登校の未然防止につながると考えられる。さらに、児童生徒の社会的能力を高めて、友人関係を向上させることは、児童生徒一人一人が将来自らの問題を回避・解決できる大人へと成長するこ

となる。

不登校が増加する時期としては 2 つある。一つ目は、中学校入学時である。中学校に入学した時、他の小学校からの入学者と新しい人間関係をうまく築くことができず、不登校などの学校不適応の問題が発生する（小泉,2011）。

二つ目は 2 年次の 2 学期で、実践校不登校実態調査でもこの時期に欠席日数が増える傾向がある。最近の中学校では、学級の中に気の合う数人の少人数グループが複数存在し、狭いグループの中でのみ人間関係が形成されている（土井,2008）。これは、近年の児童生徒によくみられる傾向で、金山・小野(2006)は、円滑な対人関係に必要な社会的スキルが不足している子どもは社会的不適応に陥るリスクが高いとしている。社会的スキルに関して、江村・岡安（2003）は、中学校 1 年生を対象に学級を単位とした集団社会的スキル教育を約半年で総合的な学習の時間を利用して 8 セッション行った結果、孤独感が減少し、友人サポートが上昇していたと報告している。この長期にわたる体系的な集団社会的スキル教育を行うことは、生徒の社会的能力を向上させ、人間関係を良好な状態に保つ上で有効な方法であると思われる。

本研究では、SEL-8S プログラム（Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School）を用いて社会的能力の向上を図ることを目指す。SEL-8S プログラムとは、社会性と情動の学習、すなわち「自己の捉え方と他者との関わり方を基盤とした、対人関係に関するスキル、態度、価値観を育てる学習」（小泉,2011）の中の 1 つのプログラムである。このプログラムを学校教育計画の中に位置づけ、継続した実施により、生徒の社会的能力の向上を目指す。

また、登校しつつも「学校に行きたくない」と感じている子どもの存在は従来から指摘されている。森田(1991)は、「学校へ行くのが嫌になる」という登校を回避する感情を示す生徒は、実際には登校している生徒の中に一定数存在し、「潜在的な不登校への可能性を持った層」として不登校現象の大きな裾野の広がりの中に組み込んで考察する必要があるとしている。五十嵐・萩原(2004)はこれらの層を「不登校傾向」とし、不登校の前駆的状态としてとらえている。これらの「不登校傾向」を示す生徒の実態を把握し、適切な援助を行うことで登校意欲が高まり、不登校未然防止につながると考える。

(3) 研究全体の目的

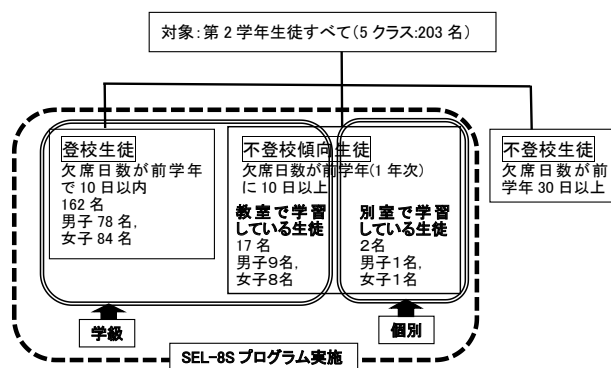


図1 前年度登校日数による生徒の群分け

本研究の目的は、登校しているすべての生徒の社会的能力向上のために、社会性と情動の学習のSEL-8S プログラムを実施し、周囲の人々や集団と良好な関係を持つ力を身に付けることで不登校の未然防止に効果があるかを検証することである。検証は、登校状態及び欠席日数から群分けして行う。通常学級で学んでいる生徒のうち、前年度に10日以上欠席している生徒を「不登校傾向生徒」とし、それ以外の通常の学級の生徒を「登校生徒」とする。なお、教室に入ることができず、別室で学習している生徒を「別室登校生徒」として、「不登校傾向生徒」に含める（図1）。これらの群の生徒の社会的能力の向上が学校適応を促進し、欠席日数の減少につながるかどうかを検証する。別室登校生徒には個別にSEL-8S プログラム実施する。

2 研究 I

(1) 目的

第2学年の全学級と別室登校生徒を対象に、SEL-8S プログラムの授業実践を行い、社会的能力と学校適応感の向上についての有効性を検証することを目的とした。

(2) 方法

実施期間

2018年5月から2019年2月まで

対象

A 中学校2年生全学級（203名）が参加した。集計には1年次に欠席が10日未満の生徒162名（登校生徒：男78名、女84名）と、欠席が10日以上（不登校傾向生徒：男9名、女8名）の回答を用いた。なお、不登校傾向生徒には、別室登校の生徒2名（男女1名ずつ）を含む。

測定内容

学校環境適応感尺度（ASSESS）（栗原・井上, 2013）とSEL-8S 生徒による自己評価を、5月、12月、2

月の3回実施した。その他出席状況調査、生徒の振り返りや教師事後アンケートも実施した。

生徒の実態把握のための研修会

第1回アンケート調査で明らかになった学級の実態や個人の特性について、ASSESS、SEL-8S 生徒による自己評価の2種類のグラフで表した個人カルテ「お助け君」（木村・小泉, 2017）を用い、6月15日に学年研修会を行った。学級分布図と個人カルテを見比べながら、欠席がちな生徒について話し合った。

2回目の研修会は、第2回目調査結果をもとに、1月10日にASSESS 学級平均表と学級内分布表の検討と、「お助け君」で生徒の変容を確認した。

授業実践

授業(表1)は学年の教師10名が担当した。そのうち、ストレスに関する3回の学習では、本校スクールカウンセラー(SC)がT2となり、生徒への助言を行った。別室登校の生徒2名には、実態把握にもとづく生徒の特性に合った内容で個別にSEL-8Sプログラムを実施した(表2)。

①「状況に応じたあいさつ」

6月上旬から行われる職場体験に向けて、体育館にて2年生全員を対象に行った。望ましいあいさつの仕方について学び、代表生徒に模範演技を行なわせた。その後グループに分かれてロールプレイを行った。授業後は、望ましいあいさつ「『おかめ』のあいさつ」のポスターを拡大コピーして学年掲示板に掲示した。その後の職場体験事前指導でももう一度生徒に問いかけ、意識づけを行った。

②「わかりやすく伝えよう」

7月に修学旅行の話し合い活動の事前学習とし

表1 学級でのSEL-8Sプログラムユニット

| 内容 | 学校行事・総合的な学習の時間の事前学習として | 友達とのかかわりに関するプログラム | SCと連携したストレスマネジメントに関するプログラム |
|------|---|-----------------------------|---|
| 意義 | 実際の活動に生じやすい | 不登校傾向生徒は友だちとのかかわりに課題をもつため | 生徒のストレス反応が軽減し不登校感情が軽減するという先行研究(三浦, 2006)から |
| ユニット | 「状況に応じたあいさつ」(職場体験) 「わかりやすく伝えよう」(修学旅行) 「私の進む道」(キャリア教育) | 「友だちが怒っちゃった!?!」 「冷静に伝える」 | 「短所を乗り越える!」 「ストレスマネジメント」 「ポジティブに考えよう」 |

表2 別室登校生徒に対するプログラム

| 月 | 日 | 内容 | ねらい |
|----|----|----------------|-------------|
| 7 | 5 | 「わかりやすく伝えよう」 | C 意思伝達 |
| 10 | 11 | 「短所を乗り越える!」 | B 自己理解 |
| 10 | 31 | 「ストレスマネジメント」 | E ストレス認知・対処 |
| 1 | 24 | D6「冷静に伝える」 | C 感情伝達 |
| 1 | 29 | B2「短所を乗り越える!」 | B 自己理解 |
| 2 | 21 | E2「ポジティブに考えよう」 | F 精神衛生 |
| 3 | 7 | G3「私が歩む道」 | G 進路決定 |

て行った。2年生全学級各教室で報告者が実施した。T2に担任、学年主任が入り、伝え方の良い例と悪い例を示した。ロールプレイのやり方がわからない生徒に学級担任が声をかけた。

③「短所を乗り越える!」

この回から各学級担任がT1として授業を行った。T2にSCが入り、短所の別の見方について助言を行った。はじめに「自分理解」としてエゴグラムを作成し、短所と長所を出し合い、別の見方について話し合った。事後は授業に関連したSC通信を生徒に配付し、2年の掲示板に掲示した。

④「ストレスマネジメント」

SCがT2として入り、ストレス解消法について説明した。まず、ストレスの種類とストレス対処法について考えた。その後班で交流し、ストレス対処法の分類分けを行った。後半はストレスを和らげるための呼吸法、リラックス体操、イメージトレーニングなどをSCが紹介した。

⑤「友だちが怒っちゃった!?!」

人間関係においてトラブルが起きた時、解決のポイントを理解し、実際にトラブルが起きたとき自分で解決することができるようになるための学習である。まず、友だちとトラブルになったときどうしているかをチェックしてから、解決のポイントの「トラブル解決4兄弟」について学習した。

⑥「冷静に伝える」

怒りを冷静に伝えるための「こころの信号機」モデルを理解し、「I(私)メッセージ」で自分の気持ちや思いを伝えるロールプレイを行った。

⑦「ポジティブに考えよう」

自分の心の状態に気づかせるため、心の健康チェックを行った。そして悲観的な考え方の例を挙げて班で話し合った。その後、前向きな考え方にするにはどう変えたら良いか意見を出し合った。

⑧「私が歩む道」

これまでの進路学習のまとめとして、3年生に進級したら、学校生活をどのように送っていくか具体的に考えさせた。そして目標達成のポイントについて学習し、春休みの過ごし方と次年度の目標を立てさせた。

(3)結果と考察

社会的能力の変化

平均値と標準偏差をもとに、群(登校生徒・不登校傾向生徒)×時期(5月・12月)の2要因分散分析を実施した。その結果、生活上の問題防止スキル、応用的社会的能力、社会的能力全般で交互作用が有意な傾向を示した。いずれも不登校傾向生徒の得点が上昇する傾向にあった(図2)。

学校適応感(ASSESS)の変化

社会的能力と同様の分析を行ったところ、教師サポートと向社会的スキルの交互作用に有意な傾向が見られた。どちらも不登校傾向生徒の得点が上昇する傾向にあった(図3)。

出席率の変化

1学期と2学期の出席率(出席日数/出席すべき日数)について、社会的能力と同様の分析を行った結果、交互作用が有意であった。不登校傾向生徒の2学期の出席率が低下していた(図4)。

ASSESSとSEL-8S生徒アンケートの結果から、登校生徒の変化に比べて不登校傾向生徒の変化が大きい傾向が示されたことから、不登校傾向生徒にとってSEL-8Sプログラムの実践は有効であったと推察される。登校生徒には変化はあまり見られなかったことから、プログラム終了後の振り返りや称賛、継続した声掛けが課題といえる。不登校傾向生徒の出席率が改善しなかったことについては、個々の具体的な支援計画の立案を行う必要がある。

生徒の学習前後の反応

学校行事・総合的な学習の時間の事前学習として(①②⑧):「状況に応じたあいさつ」では、ロールプレイを繰り返すうちに少しずつ相手の顔を見て話ができるようになってきた。職場体験学習終了後に各事業所に行ったアンケートでは、「挨拶や返事ができるようになった」という項目について、45事業所のうち32事業所で「変化があった」という回答が得られた。「わかりやすく伝えよう」の振り返りアンケートでは、修学旅行でトラブルになりそうとき今日習ったことを使いたい」という回答が得られた。

SCとの連携(③④⑦):SCとTTで行った授業の後、SCに「今度話しに行っていていいですか。」と尋ねてきた生徒がいて、SCと生徒をつなぐきっかけになった。授業ごとにSC通信を発行し、授業の振り返りを家でもできるようにした。

友だちとのかかわりに関するプログラム(⑤⑥):「友だちが怒っちゃった!」では、トラブルに対して、「相手がアクションを起こすまでじっと待つ」や「トラブルの存在を忘れる」など、トラブルに対して行動しないと答えた生徒が見られた。学習後の振り返りでは、「まずゆっくり考えて解決方法をさぐり、それを実行するやり方でいけば解決できるかもしれません」という回答が得られた。

不登校傾向生徒(教室)の反応

人間関係に対する苦手意識をもち、ストレス耐性の弱さを課題とする不登校傾向生徒の、授業後

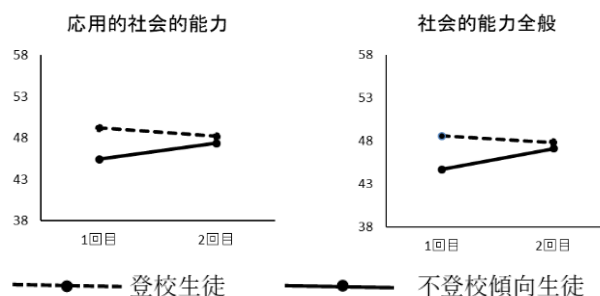


図2 SEL-8S 生徒による自己評価の得点変化(抜粋)

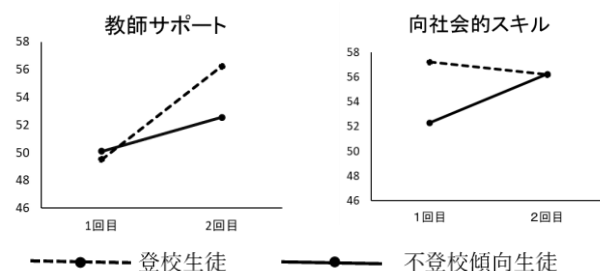


図3 学校環境適応感尺度 (ASSESS) の得点変化(抜粋)

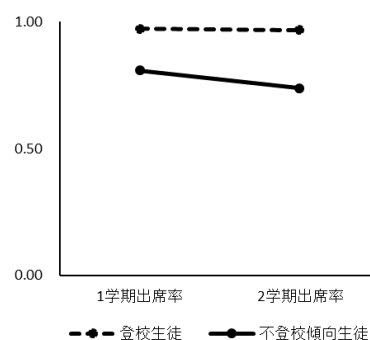


図4 2018年度の出席率の変化

の感想は以下の通りである。

④「ストレスマネジメント」

「もし、ストレスをかかえた時は、人に相談したり、深呼吸したりしようと思いました。大会の3日前とかで、緊張して、ストレスをかかえた時は人一倍練習して、少しでも自信にかえられるようにしようと思いました。」

⑤「友だちが怒っちゃった?」

「今後もし、何かケンカなどをしたら、このような解決法をしたいと思いますし、解決することが大切だと思いました。」

⑥「冷静に伝える」

「毎日使っている言葉だけど、一言一言を大切にし、考えてから言おうと思いました。これからたくさんの人と話すことがあると思うので気を付けていきたいです。」

別室登校生徒の反応

別室登校生徒へはほぼ 1 対 1 の個人指導となった。どの活動でもとても真剣に取り組んでいた。

「短所を乗り越える！」では、報告者が短所を長所に言い換えて伝えると、とても嬉しそうだった。別室登校生徒の 1 人は 3 学期から教室で授業を受けることができた。

教師事後アンケート

「この学習により人間関係を円滑に進めるコツをつかんできたようである」「友だちに対しての対応がやさしくなった」「一人一人が課題に対して自分なりに考えることができていた」「プログラム終了後、物事を前向きに考えていく姿があった」という回答が得られた。学年職員は生徒の気持ちの変容を感じているようであった。

3 研究Ⅱ

(1) 目的

全校生徒を対象として SEL-8S プログラムを実践することにより、生徒の学校適応の促進と社会的能力の向上を図り、登校生徒の人間関係の向上と不登校の未然防止及び不登校傾向生徒の学校回避感情の改善、そして別室登校生徒については不登校の改善と通常学級復帰に効果があるかどうかを検証することを目的とした。

(2) 方法

実施期間

2019 年 4 月から同年 12 月

対象

全学年の 16 学級（1 年 233 名、2 年 191 名、3 年 204 名）が実施群であり、別の中学校全学年 6 学級（204 名）が SEL-8S プログラムを実施していな

い協力群として参加した。

測定内容と測定方法

検証には実践の事前と事後に、生徒質問紙として SEL-8S 生徒による自己評価、不登校傾向尺度（五十嵐，2012）、学校環境適応感尺度（ASSESS）を実施した。その他、不登校実態調査や生徒による学習の振り返り、教師アンケートを実施した。分析には、HAD（清水，2016）を用いた。

手続き

教育課程編成 SEL-8S プログラムの実施を生徒指導部の一環と位置付け、校務分掌における特別活動係が中心となって全校で学級担任による実践を行い、報告者が T2 として参加した。これまでの SEL-8S 実践例（香川・小泉，2014）等から、社会的能力を向上させるためには、7 回以上の授業実施が望ましいことから各学年 8 回のユニットを、学校行事等の関連を図りながら表 3 のように計画した。

職員の共通理解のための職員研修 4 月当初の職員会議で本研究について説明し、生徒指導委員会では、研究Ⅰの報告と研究Ⅱの実実施計画について説明し、理解を求めた。5 月末に、異動した職員を含む全学年教職員に対して校内研修会を実施した。その際、生徒理解の資料として、個人カルテ「お助け君」を用いた。SEL-8S 実施にあたっては、セッションの内容・関連行事に合わせて、校務分掌における総合学習部会、学級活動部会が中心となり、指導案を検討していった。セッション終了後に実施学年の教職員に対してアンケート調査を行い、生徒の様子や改善点について尋ねた。実践後に、各学級の様子や生徒の感想などを研究通信としてまとめ、教職員に配付した。また、学年ごとに掲示板を設け、キーワードを記したポスターを掲示して

表 3 SEL-8S プログラム 年間計画

| | 4 月 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 9 月 | 10 月 | 11 月 | 12 月 |
|-----|-----------------------|---------------------------|------------------------------|---------------------------------|---|--------------------------------|--|--|
| 行事 | 始業式 入学式 身体測定 | 体育会 | ふれあい学級 避難訓練 | 学期末大掃除 終業式 | 始業式 修学旅行 暴力団排除教室 | 文化展 合唱コンクール | 期末考査 避難訓練 規範意識育成講演会 | 学期末大掃除 終業式 |
| 1 年 | 「どうぞよろしく」 ・学級活動 1 | | 「しぐさと態度のコミュニケーション」 ・総合 | | 「学校でのミニボラ？」 ・総合（合唱コンクール） （H 学校でのボランティア） 「はっきり断ろう」 ・学級活動 2 （C 意思伝達） | 「友だちが怒っちゃった！」・学級活動 2（望ましい人間関係） | 「道具の管理」 ・学級活動 3 （A 基本的生活習慣） 「顔の見えないコミュニケーション」 ・学級活動（D 関係づくり） | 「私のいいところ」 ・総合（進路学習） 「マナーを守ろう」 学級活動 2 （D 関係づくり） |
| 2 年 | 「どうぞよろしく」 ・学級活動 1 | 「状況に応じたあいさつ」 ・総合（職場体験） | 「聞く」と「聴く」 ・学級活動 2 | 「わかりやすく伝えよう」 ・総合（修学旅行） | 「学校でのミニボラ？」 ・総合（合唱コンクール） 「はっきり断ろう」 ・学級活動 2 （C 意思伝達） | | 「短所を乗り越える！」 ・学級活動 2 （B 自己理解） 「顔の見えないコミュニケーション」 ・学級活動 | 「マナーを守ろう」 ・学級活動 2 （D 関係づくり） |
| 3 年 | 「初対面での話し方」 ・学級活動 1 | 「上手教え方」 ・総合（ブロック活動） | 「時間を大切に」 学級活動 3（期末考査に向けて） | 「時間を大切に 2」 ・学級活動 2（夏休みの過ごし方） | 「学校でのミニボラ」 ・総合（合唱コンクール） 学級活動 2（C 意思伝達） | | 「ストレスマネジメントⅢ」・総合（進路学習） 「顔の見えないコミュニケーション」 ・学級活動 2 （望ましい人間関係） | 「“私”への思い」 学級活動 3（B 他者理解） 「マナーを守ろう」 ・学級活動 2 （D 関係づくり） |

啓発を行った。

8月末に SEL-8S 校内研修 2 回目を実施した。各学年にいる不登校リスクの高い「不登校傾向生徒」について、小学校 4 年生からの欠席日数を提示し、「登校生徒」と「不登校傾向生徒」の学校環境適応感尺度 (ASSESS) と SEL-8S 生徒による自己評価、不登校傾向尺度の結果を比較した。その後「不登校傾向生徒」の支援について学年ごとに話し合い、援助チームシート (石隈・田村, 2003) を作成した。また、SEL-8S 実施の際の留意点等について提案を行った。

実践の具体的内容

登校生徒について 学年の実態に合わせ、行事と関連させて実施し定着を図った。「上手な教え方」、「状況に応じたあいさつ」、「わかりやすく伝えよう」、「学校でのミニボラ?」はそれぞれ体育会、職場体験、修学旅行、合唱コンクールの事前学習として行った。定期考査に向けて、自主学習のための学習支援として、「時間を大切に」「道具の管理」を行った。実践の後は学年掲示板にポスターを掲示した。また、ストレスマネジメントに関する内容も取り扱い、不登校傾向生徒をはじめ、すべての生徒のストレス認知と対処について学習した。

別室登校生徒への支援 1 学期末の時点で断続的な登校が見られ、登校した際にはほぼ別室で過ごしている 1 年生と 2 年生の生徒 2 名について SEL-8S プログラムを実施し、社会的能力の向上を目指した。

1 年生については、基礎調査票・評価シート (黒澤, 2014) の結果より、対人関係・社会性に課題があり、プログラムにも関心を示さなかった。そのため、SEL-8S プログラムを表 4 のように実施した。2 年生については、不安が強い傾向があったため、自己のコントロールとストレス認知・対処を中心とした個別の SEL-8S プログラムを表 5 のように実施した。

(3) 結果と考察

学校環境適応感尺度 (ASSESS) から SEL-8S プログラム実施前後の各因子得点の差を従属変数として、学校 (実践群・協力群) × 群 (登校生徒・不登校傾向生徒) による 2 要因分散分析を行った。その結果、「向社会的スキル」「教師サポート」の因子において、実践群と協力群の間に有意な差が見られた。実践群の方が得点の上昇が大きかった (図 5)。群 (登校生徒・不登校傾向生徒) についてはどの因子においても、有意な差は見られなかった。

SEL-8S 生徒による自己評価から 同様の方法で

表 4 別室登校 A に対する SEL-8S 実施計画

| 時期 | ユニット名 | ねらい |
|-------|--------------------------------|-------------|
| 6/25 | ①「相手はどんな気持ち?」 (SEL-8S 小学校編) | B 自己の感情理解 |
| 7/16 | ②「上手だね」(SEL-8S 小学校編) | C 感情伝達 |
| 9/12 | ③「おはようございます」 (SEL-8S 小学校編) | A 基本的生活習慣 |
| 9/18 | ④「早寝早起き朝ごはん」 (SEL-8S 小学校編) | B 自己のコントロール |
| 10/3 | ⑤「短所を乗り越える!」 | B 自己理解 |
| 10/24 | ⑥「ストレスマネジメント」 | E ストレス認知・対処 |
| 11/7 | ⑦「友だちが怒っちゃった!」 | G 自己理解 |
| 12/5 | ⑧「聞く」と「聴く」 | G 進路選択 |

表 5 別室登校 B に対する SEL-8S 実施計画

| 時期 | ユニット名 | ねらい |
|-------|------------------|-------------|
| 9/4 | ①「わかりやすく伝えよう」 | C 伝える |
| 9/26 | ②「ストレスマネジメント I」 | E ストレス認知・対処 |
| 10/10 | ③「友だちが怒っちゃった!」 | D 問題解決 |
| 10/24 | ④「ストレスマネジメント II」 | E ストレス認知・対処 |
| 11/7 | ⑤「短所を乗り越える!」 | B 自己理解 |
| 11/28 | ⑥「ポジティブに考えよう」 | F 精神衛生 |
| 12/5 | ⑦「私のいいところ」 | G 自己理解 |
| 12/12 | ⑧「私の夢」 | G 進路選択 |

分析を行った結果、「他者への気づき」「責任ある意思決定」の因子で有意傾向の交互作用が見られた。「他者への気づき」では、実践群の不登校傾向生徒の得点の上昇が大きく、「責任ある意思決定」では、協力群の不登校傾向生徒の得点の下降が大きかった (図 6)。また、「対人関係」「基礎的社会的能力」「社会的能力全般」において、実践群が協力群より得点の上昇が大きくなっていた。

不登校傾向尺度から 同様の方法で分析を行った結果、「心理的な不調傾向」で有意傾向の交互作用が見られた。実践群の不登校傾向生徒は心理的な不調傾向が減少し、協力群の不登校傾向生徒は心理的な不調傾向が増加する傾向にあった (図 7)。

不登校生徒率の比較から 2019 年度の、実践群・協力群それぞれの欠席日数が 30 日を超える生徒の人数と全校の人数との割合を比較した。実践群の欠席率の増加は協力群よりも低く、実践群と協力の差は広がっていた (図 8)。2018 年度と 2019 年度 (12 月まで) の登校生徒・不登校傾向生徒を比較すると、前年度欠席が 10 日以内の生徒が次の年度に 10 日以上欠席となった割合は 3.03% で、逆に前年度欠席が 10 日以上で次年度の欠席が 10 日以内になった割合は 7.48% であった (表 6)。新たに不登校傾向となる生徒よりも、不登校傾向が

解消される生徒の割合が高かった。

SEL-8S プログラム振り返りから 12月に、全校生徒に対して「1 SEL-8S プログラムで学習したことを覚えている」など5項目の振り返りアンケートを行ったところ、「4そう思う」「3少しそう思う」と回答した生徒は、登校生徒・不登校傾向生徒ともに3項目で半数以上という結果となった(図9)。特に「5 日常でのストレスや困ったことが起こったとき自分では対処できる」について「4そう思う」「3 少しそう思う」と回答した生徒が登校生徒・不登校傾向生徒ともに7割を超え、生徒自身がトラブルに巻き込まれたとき自分で対処できていると考えていることが分かった。振り返りの自由記述では、学習を通して自分自身が「変わった」と感じることにについて「私は相手の気持ちを知るヒントを覚えて、友だちが話している時、この人は〇〇を伝えたいんだなというのがわかるようになりました。」「携帯でメッセージをやり取りするとき、送る前に内容を確認して送るようになりました。」「ストレスがたまったときに、何かにあたって解消させるのではなくて、外に出て深呼吸をしたりして解消できるようになった。」などの感想が得られた。

教師用事後アンケート 授業実践についての事後アンケートでは、「活発に活動している姿が印象的でした。」等意欲的な生徒の姿についての記述が見られた。また、今後やってみたいテーマとして、SNSについての学習が必要である等学級の実態を考えた提案があり、実際の計画にも反映させることができた。研修会後の事後アンケートでは、「不登校未然防止の取組が大切であるということを改めて感じました。」「小学校時の出席日数が知れて、頑張っているところもみれてよかったです。色々な人と協力しながら少しでも減らしていきたいです。」という感想が得られた。

別室登校生徒について 1年生の生徒については、「相手はどんな気持ち？」で、学年教職員がT2として参加し、ロールプレイを行った。初めは戸惑いをみせたが、顔の表情を作る「ふっくんボード」や、学年職員の声と表情を撮影したビデオに大変興味を示し、ロールプレイも自分なりに工夫して答えた。「じょうずだね」では、導入でペープサートを用いた。ペープサートに大変興味を持っていた。授業後は、キーワードのポスターを教室内に掲示した。「おはようございます」の学習後から正しい姿勢であいさつをすることを意識する姿が見られた。回を追うごとにプログラムの内容に興味をもち始めた。学校適応感・SEL-8S 生徒による自

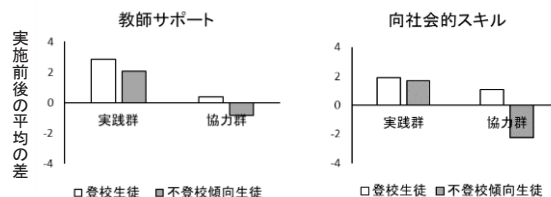


図5 学校環境適応感尺度 (ASSESS) の比較 (抜粋)

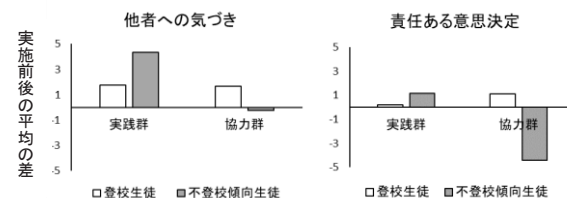


図6 SEL-8S 生徒による自己評価の比較 (抜粋)

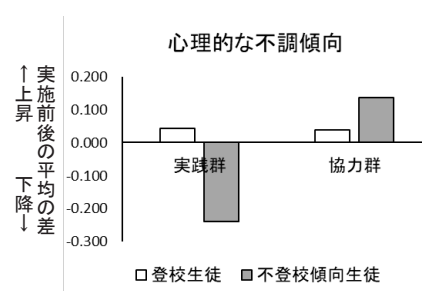


図7 不登校傾向尺度の比較 (抜粋)

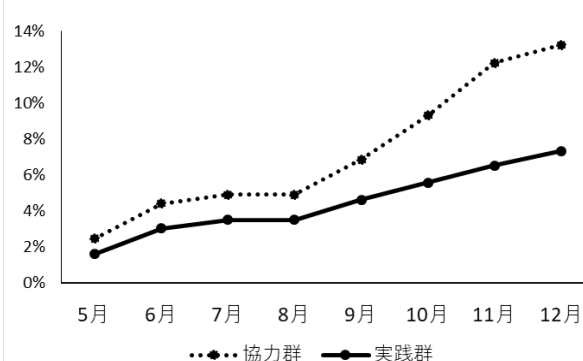


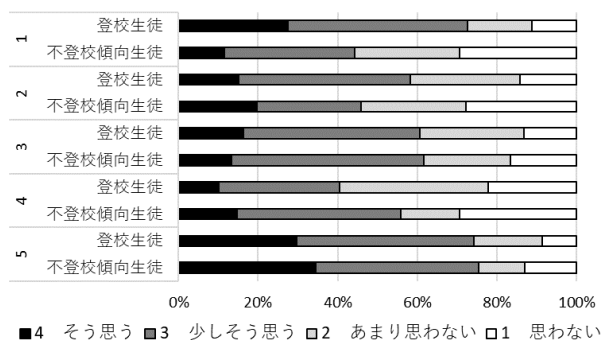
図8 2019年度 不登校生徒率の比較

表6 2018年度と2019年度の登校生徒・不登校傾向生徒の比較(%)

| 変数 | 出現値 | 2019年度 | | 合計 |
|--------|---------|--------|---------|-------|
| | | 登校生徒 | 不登校傾向生徒 | |
| 2018年度 | 登校生徒 | 78.98 | 3.03 | 82.01 |
| | 不登校傾向生徒 | 7.48 | 10.51 | 17.99 |
| | 合計 | 86.46 | 13.54 | 100 |

己評価には大きな変化は見られなかったが、不登校傾向尺度の「心理的な不調傾向」の得点は減少した。また、担任によると少しずつ行動に変化が見られたということだった。今後も継続して学習を続ける必要がある。

2年生生徒は、9月の「わかりやすく伝えよう」



| | |
|---|---------------------------------|
| 1 | SEL-8S プログラムで学習したことを覚えている。 |
| 2 | SEL-8S プログラムで学習したことは日常生活で役に立った。 |
| 3 | 学習を続けたことで、友だちとのかかわりが良くなった。 |
| 4 | 学習を続けたことで、ストレスに強くなった。 |
| 5 | 日常でのストレスや困ったことが起こったとき、自分は対処できる。 |

図9 SEL-8S プログラム振り返りアンケート項目と結果

は教室で他の生徒とともに取り組むことができた。その後別室で報告者とともに振り返りを行い、もう一度ロールプレイをして定着を図った。「短所をのり超える！」は、担任・報告者で、学級で行ったものと同じ内容で実施した。短所を担任が言い換えると、とてもうれしそうだった。2年生生徒は学校適応感尺度の「友人サポート」の項目と、「SEL-8S 生徒による自己評価の「他者への気づき」の項目について伸びが見られた。「わかりやすく伝えよう」では所属学級での学習に参加し、修学旅行にも参加した。その他は報告者・学級担任が授業を行い、どの授業にも前向きに取り組み、自分の今の気持ちについて考えている姿があった。学級担任と所属学級の生徒の誘いにより、2学期末の学年集会・終業式には所属学級で参加した。

4 総合考察

本研究は不登校の「未然防止」として、SEL-8S プログラムの実施による一次支援を基本として

「不登校傾向生徒」に対する支援（二次支援）と別室登校生徒に対する支援（三次支援）に取り組んだ。

「不登校傾向生徒」に対する二次支援では、経年の欠席日数の調査と「個人カルテ」の作成を行った。生徒の実態把握の方法を整理し、具体的な支援について校内研修会で検討する機会を設けたことは、校内での「教育的予防」の方法の提示になったと考える。

一次支援と二次支援の結果、SEL-8S 生徒による自己評価と SEL-8S プログラムの振り返りで、生

徒の「他者への気づき」「友だちとのかかわり」について向上が見られたことから、生徒自身が友だちとのかかわりについて自信がもてるようになってきたといえる。こうした社会的能力の向上が、研究Ⅱの2019年度の不登校生徒率の低さにつながったことが示唆された。

三次支援の結果、別室登校生徒に大きな変化は見られなかったが、個別対応の利点を生かした個別のプログラム実施により少しずつであるが生徒の行動に変化が見られた。

今後の課題として、実践校の不登校生徒の割合が全国平均に比べて高い状態にあるので今後継続して実施していく必要がある。一次支援の SEL-8S プログラムについては、教育課程に位置づけていき、各行事との関連をもたせ、事前・事後指導で学習プログラムを組むことが必要であると考え。学年の特徴に合わせたものになるように特別活動係が中心となり、組織的な活動にしていくことがより有効な実践となる。

二次支援としての課題としては、小学校からの欠席日数のデータ管理を組織的にを行い、生徒の変化にいち早く対応できるシステムづくりであるとする。三次支援の課題としては、生徒のアセスメントと、特性に合わせた学習プログラムの実施を継続して行っていくことであるとする。

主な引用文献

- 赤羽根直樹・宮崎英夫・小池守・河崎雅人 2016 中学校における不登校発生要因の解明に関する実践的研究 帝京科学大学教職指導研究 1, 1-8
- 江村理奈・岡安孝弘 2003 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 1 教育心理学研究 51, 339-350
- 五十嵐哲也 2012 小中学生版・不登校傾向尺度の開発 教心第 54 回総会 学校心理学 PB-080
- 香川尚代・小泉令三 2014 小学校での SEL-8S プログラムの導入による社会的能力の向上と学習定着の効果 教育心理学年報第 7 号 (2014 年度) 97-109
- 小泉令三・山田洋平 2011 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の進め方 小学校編・中学校編 ミネルヴァ書房
- 金山元春・小野正彦 (2006). 中学生に対する集団社会的スキル訓練 教育実践総合センター研究紀要 15, 77-84
- 文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター (2014). 生徒指導リーフ・不登校の予防 Leaf.14

謝辞

本研究に際し、機会を提供してくださった福岡県教育委員会及び北九州教育事務所、直方市教育委員会、また、在籍校や協力校の校長先生をはじめ、ご協力していただいた全ての先生方に、心より感謝申し上げます。